

園長だより

夏は暑いと言ひ、冬は寒いと言ひ、なにかとぼやいていないと季節の変化にはついていけないこの頃です。寒さが増すと体の緩慢さも増します。元気な子ども達から活力をもらい身体を動かす機会を多く持ちたいものです。

子どもとことば

大人になっても人前で話すことは簡単なことではありません。立場上、人前で話す機会は多々ありますが胸の中にあることをしっかりと伝え理解してもらえたという経験は少ないものです。

ある日の事、子どもに理不尽(感情的)に言葉を伝えている場面に出会う事がありました。

母親と子どものやりとりです。仮のその子をA子ちゃんとしましょう。A子ちゃんは母親に伝えたいことがある。言葉が堪能に使える年齢ではない(3歳位である)

母親は唐突に「はっきりしなさい」

「ぐずぐず、言っていないの」「なんでわからないの わからずや」と少し離れたところから見ていたのでA子ちゃんの思いは私にはわかりません。いらだった母親の前で泣きじゃくってしまうA子ちゃんです。

遠い記憶になりますが我が子にもこんなケースがあつたことを思い出します。大人はよく使ってしまう言葉かもしれません。



子どもが何かを伝えようとしている。子どもの育ちの中ではすらすらと言葉が出てこない事など当たり前のこと、A子ちゃんの日常には、理不尽な会話のやりとりが度々、起こっているのかもしれない。

穏やかに対応できないものなのか、子どもの年齢が低くなれば尚更の事、たどたどしい言葉を使い、身振り手振りを加えて、今、自分ができうる表現をつかい相手に思いを伝えている。時には泣いて、寝転び、地団駄を踏み何とか伝えようとする姿もよく見る光景です。



口を閉ざしてしまう子ども達

こんな場面に出会うこともありました。

○男くんは自分の思いを伝えることが苦手です。※大人が苦手と決めつけているかもしれません。自分の思いを伝えづらい環境なのかもしれません。

もじもじして母親に自分の思いを伝えることができません。できることは耳元でそーつと「あのね ○○なの」と伝えることです。

でも母親はそんな○男くんの気持ちとは裏腹に「はっきりと大きな声でいいなさい」「男なんだから しっかりいいなさい」と

そんなやりとりは日常のこと、とうとう、○男くんは口を閉ざし、寡黙になっていきました。

もどかしさの経験を乗り終える前に話すことが苦痛と感じてしまったわけです。



大人の振る舞いを見直す

大人の温かい対応、共感的に応答し対話を楽しめるようにしてあげたいものです。要は相手の心(心情)を読み取ってあげること、低年齢になれば心情の理解に付随して周囲の環境にも目を向けること、その子が揺り動かされている状況も考え、伝えたい、訴えたいことを感じ取ってあげることです。

○男くんの母親は保育園に相談しました。「なんとか なりませんか 寡黙な我が子、引込み思案の我が子をなんとかして」と相談を受けた先生は集団の中で自分の思いを伝えられる機会を多く作ろうと試みるわけです。

○男くんにとっては先生の行為は良い選択とは言えません。

もっと○男くんの心情に寄り添った対応があることに違いはありません。

聞き手の存在が大切

伝えたいと言うことは聞き手が存在するということ、その聞き手が聞き上手にならなくてはなりません。聞き上手とのやりとりとその経験が言葉の獲得や発語に大きく影響を与えることとなります。

子ども(子ども達)との生活、あたたかいやりとりを常に心がけていきたいものです。

その後の○男くんはどうなっていったのか人前で大きな声で言わされたり、人前に過剰

に引き出される事を見直し、遊びの中から、楽しいこと、遊びの発展に必要な要求などを親しい友達に伝える経験を積上げていくようにしていくと、数か月もすると変化が見られました。集団の中で徐々に思いを伝えられるようになっていきました。

現在○男くんは小学校の高学年、児童会で活躍していると聞いています。

当時、保育園では保護者との話し合いで対応を見直し○男くんの気持ちに寄り添い言葉にならない言葉も読みとってあげましょう。とげとげしい感情は封印して、穏やかに思いを傾聴すること、保育現場では大人の意図的な働きかけ(集団の前で思いを伝える等)を見直し子ども同士のコミュニティの中で思いをごく自然に伝える経験を積み上げていきました。

大人の振る舞いを見直し、子どもに寄り添う環境作りや対応が○男くんの成長の一助になっていました。

気づかされること多し

気づくこと少なし

さびたアンテナ磨きなおし

気づくこと多きに変換

言葉にならない言葉

言葉にできない言葉

気づき寄り添いたいものです。

